

## <被表彰者の功績概要>

### (1) 教職員

#### ① 辻 大輔（津市立育生小学校 教諭）

本県特別支援学校教諭として着任以来、聴覚障害教育に対する専門的知識に基づく教育実践を重ねてきた。公立小学校に転任してからの10年間、通級指導教室の担当として、難聴・言語障害教育の「指導の質の向上」「子どもが安心して指導を受けられる場の確保」を目指し、多くの教育実践や経験を積んできた。

こうした同人の特別支援教育に対する専門性を活かし、三重県教育委員会が主催する三重県特別支援教育実践報告会で実践報告を行ったり、全国公立学校難聴・言語障害教育研究協議会夏季全国研修会で講師を務めたり、三重県障害児就学指導委員会の委員を務めたりするなど、県の特別支援教育に大きく寄与している。

#### ② 森田 剛史（伊勢市立宮山小学校 教諭）

本県小学校教諭として着任以来、児童理解に基づく授業実践を重ね、目指す児童像・学校像の実現に邁進してきた。平成27年度から研修主任として強いリーダーシップを発揮し、児童の学力向上、教職員の指導力向上及び研修体制の確立に取り組んだ。子どもたちがどこでつまずき、困るかという視点を大切にしながら、単元のつながりを意識したスパイラル学習の確立に力を注ぎ、研究発表会では参加者から多くの支持を得た。これらの成果は、全国学力・学習状況調査の結果にも表れ、児童の学習の定着、学習を生活の場面に活かすなどの力をつけた。

この取組は各小中学校の研修主任への相談・助言を行うことにより市内全体の取組として広がり、伊勢市の学力向上の礎となっている。

#### ③ 渥美 勇輝（鈴鹿市立平田野中学校 教諭）

本県中学校教諭として着任以来、技術科担当として、情報化社会において活躍できる生徒の育成を目指し、技術分野の実践を行っている。

技術科分野のプログラミング指導において、生徒に人型ロボットを用いたサービスの開発を考えさせるなど、技術の習得はもとより、情報化社会に主体的に関わる意欲や実践力の向上を目指した指導に取り組んだ。また、平成26年度から毎年、三重県教育委員会が主催する「プログラミング教育実践研修」において講師を務め、双方向性のあるコンテンツのプログラミングの事例紹介を行うなど、プログラミング教育の普及に尽力した。

このように、市内、県内におけるICT教育を先導する活躍を見せている。

#### ④ 岡井 太郎（伊勢市立港中学校 教諭）

本県中学校教諭として着任以来、野球部顧問として生徒一人ひとりに寄り添った指導を実践しながら、手腕を発揮している。伊勢度会地区の軟式野球専門部長、三重県専門委員長を長年にわたり務め、県内の部活動の発展に貢献した。特に、県内の野球部顧問を対象とした指導者講習会において、技術面だけでなく、限られた活動時間での効果的な練習方法など現場の指導者が抱える悩みを意識した内容を取り入れるなど、県内の野球部顧問の指導力向上に取り組んだ。

また、部活動ガイドラインが策定される以前から専門部長として保護者や各地区の指導者の意見を踏まえ、生徒の健全な成長と教員の負担軽減の視点から適切な活動時間や休養日を設定した部活動の運営方法を県内に広く浸透させた。

#### ⑤ 込谷 徳隆（三重県立紀南高等学校 教諭）

本県高等学校教諭として着任し、国語科教諭として教科指導に取り組むとともに、学校全体の授業改善や指導力の向上に努めている。特に平成23、24年度は教務主任として、授

業におけるルール等を盛り込んだ授業の手引きを学校独自で作成し、すべての教員が共通認識を持って授業を行い、生徒が集中し、安心して授業に取り組める環境を整えた。

また、平成 29 年度、同教諭が教務部で行った調査から、文章の作成や会話など、コミュニケーションに関する能力に困難を抱える生徒が少なくないことが分かったことを受け、これらをはじめ生徒に 3 年間で育みたい資質・能力を「紀南スタンダード」として整理し、コミュニティ・スクールとして地域の住民ボランティア等も活用しながら主体的・対話的で深い学びに向けた学習を実践した。

#### ⑥ 向山 明佳（三重県立名張青峰高等学校 教諭）

本県高等学校教諭として着任し、情報科教諭として専門性の高い指導を行うとともに、学校における ICT 環境の整備と活用に尽力している。特に、ICT 教育の先進校として期待される名張青峰高等学校において、全生徒に 1 台ずつ貸与するタブレット端末や電子黒板機能付きプロジェクターなど、同校の教育環境を十分に活用し、生徒の視覚に訴えた授業を展開している。平成 30 年度及び令和 2 年度には、県の指定事業を受け、授業の中で情報機器活用に長ける生徒に「ICT リーダー」という役割を与え、リーダーが中心となり、生徒間の対話による情報活用能力の向上を図るなど、ICT 機器を効果的に活用した学習方法の開発において校内の中心的役割を担うとともに、研修会等を通して教職員への普及に努めた。

#### ⑦ 佐藤 千夏（三重県立城山特別支援学校 主幹教諭）

平成元年、本県中学校教諭として採用され、平成 18 年からは養護学校教諭として、特別支援教育に係る専門性を高め、ICT 機器を活用し重度心身障がい児の自立と社会参加に向けた教育に取り組んでいる。具体的には、全介助が必要な児童生徒が体の小さな動きでコミュニケーションをとれるよう、自作の「スイッチ」を改良し、音声装置と組み合わせて意志を発信できるようにしたり、タブレット端末と組み合わせて簡単な操作ができるようにするなど、個に応じた ICT 機器を活用し、児童生徒の自主的な教育活動につなげた。今年度からは主幹教諭として、ICT 機器活用の授業への普及を図り、他の教員への指導・助言を行うとともに、会議のペーパーレス化など業務の効率化においても ICT 機器の活用を推進している。

#### ⑧ 西飯 信一郎（鈴鹿高等学校 教諭）

鈴鹿高等学校において、平成 15 年から、部活動として自然科学部を率い、環境問題をテーマに、鈴鹿川水系の環境調査を基本とした環境学習を行うとともに、天然記念物「ネコギギ」の保護を中心に、野生生物の保護について探究的な活動を展開し、活躍している。

本活動を推進するにあたり、文化庁、三重県、三重県教育委員会、亀山市、鈴鹿市、地域、ボランティア等と連携し、生徒に多様な学習の場を提供するとともに、探究的活動としても生徒の指導・育成に顕著な成果をあげた。

また、本活動の成果は、小学生の体験会、地域における環境展での報告などにより、地域に還元し、地域における環境問題の学習環境づくりなども展開している。